

〔研究ノート〕

オットー・ノイラート覚え書き(2)

後藤 邦夫*

第3章 ノイラート小伝¹⁾

前回に引き続くこの第3章では、ノイラートの略歴を扱う。彼の活動領域は、哲学、社会学、経済学、博物館学等を包括する独自のものであり、しかも多面的な実践活動を伴っていた。その生涯を追うことによって彼の活動の全体像を把握すると同時に、彼が生きた時代を描くことになるであろう。

1. 生い立ちと修学の時代

オットー・ノイラートは1882年にウィーンで生まれた。父のウイヘルム・ノイラートはスロバキアのブラチスラバの厳格なユダヤ教徒の家庭に育ち、苦学してウィーン大学の哲学の学位とチュービンゲン大学の政治学の学位を取り、ウィーン農業専門学校の助教授から正教授となった人物である。彼はマルクス主義者でも社会主義者でもなかったが、当時のヨーロッパの産業社会における恐慌や失業の問題に強い関心を持っていた。その原因が資本主義社会における過度の信用膨張や利潤追求にあると考え、計画経済の可能性を考えていた。母のゲルトルート・ケンペルトはウィーンの公証人の娘で、ウイヘルムとともに豊かで知性に満ちた家庭をつくっていた。オットーはそ

*本学文学部

キーワード：イラート，ウィーン学派，論理実証主義，バイエルン・ソビエト，戦間期社会運動

のような両親のもとで書物と知的な会話に囲まれた少年時代を過ごすことが出来た。

1901年に父が死に、その翌年オットーはウイーン大学に入学し数学と物理学を学んだ。それは父の遺志であったといわれている。しかし、自分自身の能力を考慮して、彼はやがて経済学、歴史、哲学へ専攻を変えた。そして、フランク兄弟（ヨーゼフとフィリップ）、ハンス・ハーンと妹のオルガ・ハーン、そしてアンナ・シャピーレと識り合う。彼等は互いに終生の友となり、アンナはオットーの最初の妻、オルガはアンナの死後二人目の妻となった。

ザルツブルグで開かれたセミナーでオットーの報告を高く評価したドイツの社会学者フェルディナンド・テンニエスの強い勧めでオットーとアンナはベルリン大学に移り、エデュアルト・メイヤーとグスタフ・シュモーラーのもとで学んだ。1906年、24歳のノイラートはベルリン大学の哲学博士の学位を取得した。学位論文は古典古代の商業、貿易、農業の概念を扱ったもので、キケロを中心とする古典の周到な読解に基づくものであった。4章からなる論文のうち、「学位論文」として印刷されたのは最初の1章だけで、あとの3章は経済学と統計学の権威ある雑誌である *Jahrbücher für National Ökonomie und Statistitk* に2回にわたって掲載された。異例のことであり最高に評価されていたことは当然である²⁾。

7歳年長のアンナ・シャピーレはガリシア（現在はウクライナとポーランドにまたがる地域であるが、当時はハプスブルグ帝国領であった）の出身で数か国語に長じたフェミニスト活動家であった。オットーと同じ1906年に彼女もベルリン大学の博士の学位を得た。彼女のテーマは産業における保健と安全に関するドイツの各政党の政策の比較研究であった。彼女はまた、女性の権利拡張の運動史を書いた。1907年、二人は結婚した。そしてベルリンにおける学業を終えた彼らはウイーンに帰る。

2. 帰国と第1次大戦前夜における活動

2. 1 「第1次ウイーン学派」³⁾

ウイーンに戻ってから、ノイラートは1年志願兵として兵役に服し、軍学校の課程を短期間に終えて優秀な成績で将校に任官している。(このことは戦時経済論の研究や第1次大戦中の彼の活動を見るうえで重要である。)その後、新ウイーン・ビジネススクールの教員として経済学と歴史を教えた。望んでいた大学のポストではなかったが、自分の研究や仲間との議論の時間が取れたので満足であったという。経済学の教師として教科書を出版し、さらに妻のシャピーレとともに、プラトンからマルクスに至る経済学に関するアンソロジーを2巻の書物に編んでいる。(ギリシア語とラテン語の文献の翻訳はオットー、英語とフランス語からの翻訳はアンナの分担であったといわれる。)しかし、彼らにとって最も重要であったのは、後に「第1次ウイーン学派」と呼ばれるグループへの参加であった。

ウイーン学派というと、1922年のモーリツ・シュリックのウイーン大学正教授就任や1929年の「宣言」、雑誌 *Erkenntniss* の刊行など、第1次大戦の終了とハプスブルグ帝国の解体によってもたらされた一連の社会的変動と「物理学の革命」の雰囲気と所産であると考えられている。しかし、近年では、1907年から10年代初めにかけて、すでに第1次ウイーン学派と呼ぶべき若手研究者の集団が形成されていたとする見解が支持されている。それにしたがって、従来のウイーン学派を「第2次ウイーン学派」と呼ぶ。(ただ、慣用に従い、特に断らないかぎり単にウイーン学派というときは第2次を指すことにする。)このような見方は、ルドルフ・ハラーによって1980年代初頭から主張されてきた。

中心になったのは、ゲッチンゲンで当時の指導的数学者ヒルベルトに師事し帰国した数学者ハンス・ハーンと、オットーより2歳年少の1884年生まれで、すでにウイーン大学の物理学の私講師となっていたフィリップ・フランクであった。後にフランクはハーンこそが真の創始者であると述べている。第2次ウイーン学派においては、シュリックとノイラートの間に理論的対立

があったが、それは第1次の経験者とそれ以外の人々との間の微妙な距離によるという見方がある。

彼らの例会は後の「第2次ウイーン学派」と同様、毎週木曜日の夜にカフェで行なわれ、ベルリンから帰ったオットーとアンナ、そしてハンスの妹のオルガ・ハーンが常連であったが、後に頻度論的確率論で有名になるリヒャルト・フォン・ミーゼスも参加した。オルガは兄と同じく数学を専攻したが、1904年、22歳のとき病気で視力を失い、学業の継続が極めて困難になっていた。帰国したノイラート夫妻は彼女のために対面朗読を組織し、オルガがその抜群の才能によって障害を克服してシュレーダー代数に関する数学の学位論文を完成させるのを助けた。

フィリップ・フランクの記述によると、当時彼らが毎週のように集まって議論していたのは、理論的な問題だけでなく政治、歴史、宗教に及んだ。しかし、最も真剣に討議されたのは、19世紀末の物理学と哲学をめぐる状況であり、とくに、マッハ、デュエム、ポアンカレなどの著作であった。とくに、1904年から5年にかけてかかれた論文を集めて1906年にフランスで刊行されたピエール・デュエムの『物理学の目的と構造』が、早くも1908年にフリードリッヒ・アドラーによってドイツ語に訳されマッハの序文を付してライプチヒで刊行されていた。(フリードリッヒは物理学を学んだオーストリア社会民主党左派の活動家。アインシュタインを深く尊敬し、後に政治的思惑によって彼に提供されたチューリッヒ工科大学の教授ポストをアインシュタインに譲ったことで知られている。ちなみに同書の英訳は大いに遅れ、1914年の第2版を底本とした英語版がフランスの大物理学者ド・ブロイの序文を付してプリンストン大学出版局から出たのは1954年である⁴⁾。私はその訳書によってはじめてこの重要な書物に接することが出来た。名古屋大学に集中講義に来ていた武谷三男が「デュエムの英訳が出たのか。買っておこう。」と聞いたのを記憶している。) さらに、同じ1908年、ポアンカレの『科学と仮説』および『科学の価値』のドイツ語訳が出版されている。すなわち、これらのフランスの学者によって主張されたコンベンショナリズムがマッハの議

論と並んで、あるいはそれ以上に彼らの関心事となっていた。

周知のことであるが、西欧文明を支配的地位に押し上げた最大の要因は「産業革命」である。近年、社会の階級構造や資本をめぐる所有関係に基づいてその存在を否定する見解が見られるが、繊維産業から始まる工場制工業の成立、エネルギー源の石炭への転換、蒸気動力の導入、鉄道網の拡充などの技術的变化と株式市場を介する直接投資制度の成立など、産業革命と呼ぶに値するメルクマールを否定することは出来ない。しかもそれらの変化において、17世紀のいわゆる「科学革命」は必ずしも主導的な役割を演じたわけではない。このことを予見を込めて強調したのはアダム・スミスその人である。『諸国民の富』は産業革命に先行した「マニユファクチャ」の時代の生産システムに関する具体的記述を含んでいるが、スミスは、産業における改良や発明が自然哲学者の寄与とは無関係に「普通の働く人々」(common workmen)によってなされたことを強調している。ジェイムズ・ワットの蒸気機関の改良に対するスコットランドの学者たちの影響を考えると、これは多少行き過ぎた表現かもしれない。しかし、産業革命において影響力があったのは、すでに完成の域にあったニュートン力学ではなく、当時の未完成で不完全な熱学や化学であったことを後世のわれわれは知っている。その担い手たちも、軍人(カルノー、ルムフォード)、医者(マイヤー)、醸造家(ジュール)、徴税請負人(ラヴォアジエ)などであり、いわゆる大学教授型の「学者」ではなかった。

ここで、当時の熱学や化学が17-18世紀の力学的自然観から見て異質な存在であったことに注意しておかねばならない。近年、すくなくとも科学論者や文明史家が、近代の工業社会をデカルト以来の「還元主義」=「力学的自然観」=「物理学帝国主義」の所産とみなす図式として描いているが、それは根拠薄弱な単純化である。18世紀から19世紀初頭にかけては、燃焼に関してはフロジストン、熱に関しては熱素、光に関しては光粒子といった力学的実体に即した理論が支配的であったが、いずれも否定された。結果としてエネルギーのような力学的自然観の枠を外れた概念に基づく熱力学などが支配的になっ

てゆく。

このように支配的な科学が力学的自然観の枠から外れたことで、17世紀以来の力学的自然観は大きく揺らいだ。その結果として、有機体論や神秘的な自然哲学が流行の気配を見せていた。第1次ウイーン学派のメンバーたちにとっては、破綻した力学的自然観とも、非科学的な有機体論とも異なる科学的世界観として信頼に値するものがマッハの経験主義にほかならなかった。

しかし、感覚によって認識される経験的知識以外をすべて形而上学として斥けるマッハの考えの中には、理論的な科学のコアである論理的構造の存在を保障するものとしては「思考経済の原則」しかなかった。個別的経験を普遍的なものに高める契機を見出すというのはヒューム以来の難問である。

(カントは先験的な純粹悟性概念に活路を見出そうとしたが、そのような「形而上学」はフランクやノイラートとは無縁であった。) そこで、後の「論理実証主義」における「論理」の側面について大きな示唆を与えたのがデュエムらのコンベンショナリズムであり、なかんずく後世に「デュエムのテーゼ」として知られることになる命題であった。(このテーゼについては、クワインやノイラートの名も併記されることがある。)

第1次ウイーン学派に集まった若者たちがマッハをどのように理解したか、デュエムのテーゼをどのように受容したか、という問題は、オーストリア・マルクス主義や後の論理実証主義を理解するうえで重要である。しかし、このテーマは次回に譲る。

「因果法則と経験」は1907年、23才のフランクが雑誌 *Annalen der Naturphilosophie* に発表し、前回述べたように、1909年にレーニンが『唯物論と経験批判論』でこの論文を取り上げフランクを「カント的観念論者」とみなして攻撃した。しかし、それは正確でなかった。おそらく、コンベンショナリズムの形式的側面をそれと見誤ったのであろう。

1905年に発表されたアインシュタインの特殊相対性理論をフランクは速やかに理解した。1909年には「絶対運動は存在するか」という講演を行い、個人的に、もともと実験家で抽象的な数学的理論に不得手であったマッハに対

してミンコウスキ時空について解説した。(アインシュタインやフランクがマッハの影響について語っているにもかかわらず、マッハ自身は相対性理論を受け入れていなかった。)

1911年、シャピーレは男子を出産する。後にニューヨークとウイーンで社会学者として活躍するパウル・ノイラートである。ところが、シャピーレは出産後の余病で死ぬ。年長で人生に関してはリード役であった妻の急死でオットーは一時自殺を考えるほど落ち込んだといわれる。しかし、翌12年、彼は夫妻の親しい友人であったオルガ・ハーンと再婚する。(ごく親しい仲間以外は、この「早すぎる再婚」には批判的であったといわれる。)しかも、オルガは視力を失っており幼児を保育することは困難であった。そこでパウルは1921年まで上部オーストリアのプロテスタント系の施設に預けられた。

(そこには老人のための施設もあり、1914年に死ぬまでオットーの母ゲルトルートが暮らしていた。)パウルが施設を出て親子3人の家庭生活が復活するのは1921年であるが、1934年の右翼のクーデターで親子は別れる。プラハで落ち合った3人が相談した結果、両親はオランダに亡命し息子はウイーン大学で学位取得のための学業を続けることに決めたからである。1937年にオルガが死に、葬儀に出席するためにパウルはオランダに行く。それが父子の最後の出会いとなった。(パウルは後に盲目の義母について、少年期から青年期にかけての精神的成長に対して父にもまして優れた影響を与えてくれたとして最大限の謝意を表明している。)

2. 2 ノイラートの「戦時経済論」⁵⁾

1912年には、第1次大戦の前兆というべきバルカン戦争が起こっている。始めはトルコ帝国に対するバルカン諸国の戦いであったが、トルコが後退すると内部対立が激化し、ブルガリアはセルビアとギリシアにマケドニアを取られてしまう。バルカンはすでに「ヨーロッパの火薬庫」であった。12年から13年にかけて、ノイラートはカーネギー国際平和基金を受けてバルカン地域の政治と経済について調査をする機会を得、いくつかの優れたレポートを

書いている。それにもまして、この間のノイラートの仕事の成果として最も重要であったのは、その後の彼の行動や理論に大きな影響をもたらすことになる戦時経済論である。

平時のノーマルな経済秩序に対して、戦時経済を異常な事態と考えるのが常識であろう。ところが、ノイラートは経済史に関する詳細な知識に基づき、重商主義時代のヨーロッパを別とすれば、戦時経済をもひとつの秩序ある体制として捉えなければならぬと主張する。彼によれば、その体制の特徴は以下の2点である。

第一に、平時の資本主義的市場経済においては、「利潤の極大化」が経済運営の原理となる結果、設備の遊休と労働力の余剰、すなわち失業が常態化するのとは必然であるが、戦時という極限的状況下では、戦場で大量に消費される軍需品の生産のために、限られた資本と労働力の全面的な利用による「生産力の極大化」が経済運営の原理となる。したがって、戦時経済においては、市場経済に固有の景気変動は起こらないはずである。あるいは、過剰生産恐慌の勃発が引き伸ばされることになろう。

第二に、戦時経済においては、貨幣と信用の機能が収縮し、物資の徴発や配給といった貨幣に依存しない財の流通が制度的に強化される。すなわち、国家による統制経済という形態をとりつつ、貨幣経済から実物経済へのシフトが起こる。こうして、中央政府の統制による「計画経済」が戦時経済のもとで部分的に実現してゆくであろう。これが、前回の冒頭に述べた、戦時下日本のマルクス主義者による技術論研究や「戦時物動計画」への協力に関してコーエンと私が交わした会話のテーマであった。

少なくとも1914年までは、戦争が好況をもたらすという考えをノイラートはとっていた。そして、戦時経済を資本主義的市場経済の欠陥を克服する新たな社会化された経済システムへの過渡段階と位置づけていた。

しかし、未曾有の破壊と殺戮、および経済的窮乏をもたらした第1次大戦の現実には上記のような彼の考えに修正を迫った。戦後の総括において彼は、集中的に運営される戦時経済の実権を握った軍事指導者のもとで、軍需産業

の経営者と物資の流通に関わった者たちが多大の利潤を得たにもかかわらず、国民の多くは飢餓と欠乏に苦しむ結果となった、という判断を下している。

しかし、それにもかかわらず、戦争が終わった1918年にノイラートは、ある演説のなかで次のように述べたのである。

「戦時経済は、過去には決して実行されなかったような出来事が実験的に実行される機会であった。われわれを取り巻く制約を戦争経済学によって打破することが可能である（拍手）。そしておそらく、われわれは、この戦争が開始された時代にくらべて、より良く整備された未来と向き合うことができるだろう（大きな拍手）。」

それでは、この戦争の間、彼はどのような生活を送っていたのであろうか。

3. 第1次世界大戦への「従軍」

ハプスブルグ帝国とセルビア民族主義の軋轢が大戦の直接原因であった。すなわち、セルビアの将校団の内部に組織されていた秘密結社による皇太子と皇太子妃の暗殺（1914年6月28日）に怒ったオーストリア・ハンガリー帝国の対セルビア最後通告（7月23日）と宣戦布告（7月28日）がロシヤの参戦を招き、フランス、ドイツの開戦となり、一挙にパリを衝こうとしたドイツがベルギーの中立を侵犯したことがイギリスの参戦をもたらしめたことは誰でも知っている。ところで、主戦場となった西部戦線については日本でもよく知られているが、肝心の発火点である東南ヨーロッパの戦況についてはあまり語られない。そこで開戦直後の概況を記しておく⁶⁾。

開戦とともに、ハプスブルグ帝国は、直接の敵である南方のセルビアに対する戦いとその同盟国ロシヤ帝国に対する北東のガリシア戦線での戦いという二正面作戦に直面した。一般に、このような二正面作戦の遂行は極めて困難であり避けるべきだとされる。兵力の集中的運用という軍事の基本を守ることが困難だからである。そこで、帝国の参謀本部はセルビアを短期間で屈服させ、その後でガリシア戦線に主力を転じるという戦略を採用した。しかし、ロシヤの動員が予想以上に急速であったため、参謀本部は対セルビア作

戦に投入すべき部隊の一部（8箇師団からなる第2軍）を急遽ガリシア方面に大移動を行う可能性を考慮して別の場所に待機させるという方針をとった。しかし、10万人規模の8箇師団の部隊を食料や軍需品とともに予定外の戦線に移動させることは当時の輸送手段をもってしては非常な難事であり、混乱をもたらすばかりであった。それでも、8月12日からセルビヤに侵攻したオーストリア・ハンガリー軍は19箇師団の大軍であり、作戦は成功するかに見えた。彼らは、8月16日、プトニク将軍が率いる10箇師団のセルビヤ軍との大会戦に入った。いわゆるヤダール川の戦いである。結果は、戦線の中央部に位置したチェコ師団の敗退に始まるオーストリア・ハンガリー軍の大敗北であり、19日の全軍の撤退をもって侵攻は終わった。

一方、ロシアとの戦いは8月23日に開始された。当初はオーストリア・ハンガリー軍は優勢であったが、ロシアの大軍の圧力によって随所で撃破され、9月11日には総退却に転じた。（同じ11日、ベルギーの中立を侵犯してパリに迫ったドイツ軍はマルヌの会戦で敗北し、西部戦線は膠着状態となる。以後、悲惨なざんごう戦が両軍の莫大な犠牲を伴いながら続くことになる。）

8月末には、同盟国ドイツが北方の東プロイセン地区のタンネンベルヒの会戦でロシア陸軍に大打撃を与えたことで東部戦線は小康状態になった。

（さらにロシア軍はロツズの会戦にも敗れ、東プロイセン占領の企図は挫折した。）

11月15日、態勢を立て直したオーストリア・ハンガリー軍は再びセルビヤに侵攻し、首都ベルグラードを占領した。ところが、12月に入ると、全国民を動員したセルビヤの総反攻が始まった。オーストリア・ハンガリー軍は総崩れとなり、12月15日にはセルビヤ全土から退却した。（セルビヤ皇帝が自ら銃をとって兵とともにざんごうで戦ったという伝説とともに、セルビヤの歴史では有名な事件である。）

このように、セルビヤとガリシアの両戦線で、6千万の人口に見あう60万の戦闘部隊を動員したオーストリア・ハンガリー軍は大敗北を喫して以後は守勢を余儀なくされた。帝国末期の守旧的体制下の軍事指導者の無能と複雑

な民族的構成をもつ軍の士気の維持に問題があったことをチャーチルは鋭く指摘している。

ノイラートは予備役将校として招集され、通信本部の技術プロジェクト要員、輸送部隊将校、占領地行政官などの「後方任務」に従事した。この間1915年には勲章まで授けられている。1916年7月からは、国防省の第10部に設置された戦時経済委員会に移り、やがて戦時経済局の責任者に昇進した。戦争は彼が予測した通り、国家による計画経済の実験場となり、彼は自らをその渦中に投じたのであった。

同時に、彼はライプチヒの戦争経済博物館の館長となり、ウイーンとライプチヒで一月のうち2週間づつ働いた。ライプチヒでノイラートは博物館に関して多くを学んだ。博物館の事務長はウォルフガング・シューマンであった。彼は社会主義者であり、ノイラートの戦争経済論を将来の社会主義経済の基礎を与えるものとして評価していた。

ノイラートの「従軍」はかなり余裕のあるものであったらしい。1917年にはハイデルベルグ大学の教授資格をとり私講師となった。推進者の一人がマックス・ウェーバーであったという。しかし、戦時中は軍務のため、戦後は後に述べる事情のために、彼はついに大学の教壇に立つことはなかった。

この間、物理学とその歴史にも関心を寄せていたらしい。1915年には光学史に関する短いノートを発表しており、1917年にはアインシュタインに光学と音響学に言及した手紙を書いている。この忙しい時期に光学史に関心をもった理由はよくわからない。あえて推測すると、晩年のマッハが精力を傾注していたのが「物理光学の諸原理・歴史的批判的考察」であったという事情が働いているかも知れない。力学と熱学の分野ですでに行った研究をマッハは光学の分野でも完成させようとしていたのである。

(ここで、私自身の回想をさしはさむと、私がこの本の英訳をペーパーバックで入手したのは1956年である。ちょうど小山書店が物理学の初等的な講座を企画しており、師の高林が「光学史」の執筆を依頼されていた。すでに留学が決まっていた高林は大学院生の私にその仕事を託し、1956年秋パリに

向けて出発した。私がなんとかやり遂げることが出来たのはこのマッハの本のおかげである。しかし、日本の文壇史上有名な「チャタレイ裁判」に敗れ、小山書店は苦境に立った。そして、この講座はダイヤモンド社に譲渡され「新物理学講座」となった。）

1918年8月、ノイラートは除隊した。その後しばらくの間、ドレスデンに住みライプチヒに通う生活が続く。そして1918年11月ドイツ革命が起り、第1次大戦は終わる。

4. バイエルン・ソビエト共和国とその解体

ドイツ11月革命はキール軍港の水兵のストライキに始まり、たちまち南方に波及する。ベルリンではウイヘルム二世が退位、バイエルンではルードヴィヒ三世が退位した。バイエルン共和国の宣言は11月8日に行なわれた。この現実の中で、シューマンとノイラートは社会民主党の運動への参加について話しあった。すでに約束されていたハイデルベルグ大学での教職を前にして決断は困難であった。何よりもオルガが強硬に反対した。しかし、結局ノイラートは党と運動を撰んだ。最終的に彼を決断させたものは、敗戦後の窮乏の中で人々を幸福にするに違いない「管理された経済」の実現に努力することが自己の職分であるというと考えであった。

バイエルン共和国はミュンヘンの労働者兵士評議会の議長であったクルト・アイスナーを首相に、社会民主党と独立社会民主党の党员、およびひとりの無党派の人物からなる執行委員会で運営されることになった。（同じころ、ベルリンに樹立されたエーベルトを首班とする社会民主党政権は右派のフリードリヒ・シャイデマンの主導下にあった。彼らが右派の民兵を使って独立社会民主党やスパルタクス・ブントを弾圧し、ローザ・ルクセンブルグを殺したことは、すでによく知られているであろう。）

ミュンヘンにノイラートが赴いたのは1919年1月23日である。初めてのことであった。彼は首相のアイスナー、大蔵大臣のエドガー・ヤッフエと会い、彼の経済計画について話しあった。ヤッフエがその構想をミュンヘンの労働

者の前で話すことを勧めた。二日後、ノイラートは労働者兵士評議会で、「社会化の本質と道程」について語ったが、それほど高い評価は得られなかったようである。

ノイラートはザクセンに戻り、当地の農民労働者評議会の執行委員会メンバーであった社会民主党員の経済学者ヘルマン・クラノルトやシューマンとともに、今日「クラノルト・ノイラート・シューマンのプログラム」と呼ばれる経済の社会化計画を作成する。しかし、ザクセンの社会民主党政権では社会民主党を含む与党内部での対立が激しく、到底このプログラムを採用出来るような状況ではなかった。ノイラートは、完全な計画経済は農業国のバイエルンと工業国のザクセンとの協力によって達成できると考えていたようである⁷⁾。

バイエルンでは、1919年の1月12日の選挙でアイスナーの独立社会民主党は議席を減らし、保守派の進出が見られた。議会と労働者兵士評議会の対立が深まる中で、2月21日、首相のアイスナーは極右のグラーフ・アルコ・バレイによって暗殺される。議会は混乱し、社会民主党のニーキッシュを長とするバイエルン共和国中央評議会が暫定的に政権をになう。3月に入って妥協が成立し、社会民主党の穏健派ホフマンが首相となり、独立社会民主党や農民同盟を加えた内閣が出来上がった。

しかし、この体制は「二重権力」どころではない不安定さをもっていた。議会、内閣、中央評議会が並立し、さらに労働者兵士評議会もあった。

1919年3月21日、ハンガリーでベラ・クーンを中心とするソビエト共和国の設立が宣言された。「精神的支持」にとどまったオーストリアの社会民主党と異なり、バイエルンの労働運動はこの動向に大きく影響された。戦争で疲弊した経済情勢を考慮して、生産手段の「社会化」に関してはアイスナーやホフマンは慎重な態度をとっていたが、運動の急進化の中から「全面的社会化」を要求する声が高まってきたのである。ヤッフエは、通産大臣のヨーゼフ・シモンの支持のもとにノイラートにミュンヘンへ戻るよう電報を發した。そしてノイラートはバイエルンのために働くことを決断する。当時、彼

は農業国バイエルンの社会主義は農民の支持なしには不可能だと考え、保守派のバイエルン人民党の指導者とも接触していた。彼は農民を協同組合に組織し、その中央組織を中央の計画局のもとにおくことを考えていた。耕作面積や農作物の種類や量に関する指令を出すことに止め、土地の収用による農業の国有化は彼の考慮の外にあった。農民と労働者の衝突を避けるには農業における社会化と工業における社会化とを切り離すべきだとしていたからである。

3月25日、中央経済局（またの名は中央計画局）が設置され、ノイラートが責任者に任命された。任期は6年であった。（社会化の完成には5年乃至は10年を要すると考えられていた。）

ホフマン政権は不安定であった。銀行の取り付けや資本の国外逃避が相次ぎ、バイエルン経済は危機に瀕しつつあった。ノイラートは金融システムの社会化によって、この動向に対抗しようとしていた。変革が遅々として進まないことに苛立った社会民主党と独立社会民主党の党员の間から、早期のソビエト共和国宣言が必要だという声を上がり始めた。4月4日、軍事問題担当相（社会民主党）エルンスト・シュネッペンホルストは、社会党、社会民主党、農民同盟、アナーキスト、中央評議会の代表を集め、プロレタリアートの統一の手段として、早期にソビエト共和国宣言を行うべきだと主張した。出席した全政党が賛成した。その中には詩人で劇作家のエルンスト・トラー、アナーキストの文筆家グスタフ・ランダウアー、エーリッヒ・ミュッシャムらがいた。しかし、中央評議会代表ニーキッシュは共産党をも加えるべきだとして反対した。翌日開かれた会議で、共産党のレヴィネは原案に強く反対したが、各政党の代表は4月7日に、共産党を排除したソビエト共和国の成立を宣言したのであった。いわゆる「第1次バイエルン・ソビエト」である。それに対して、ホフマンは内閣を北部バイエルンのバンベルグに移して対抗した。

この政治的变化によって金融危機が切迫した。ミュンヘンから資金が流出するのを防ぐために、ノイラートは全銀行の閉店とモラトリアムを決断した。

それは彼の「社会化」に関する基本的構想とも一致した。もちろん、ミュンヘンの金融界や商工会議所は強く反発し、共産主義経済がミュンヘンの経済生活を破壊すると主張した。石炭や食料品の配給制度が準備された。ノイラートは食料不足に対抗するためには、バイエルンの国有林をも抵当に入れる覚悟であった。いずれにせよ、わずか六日間しか続かなかった第1次バイエルン・ソビエトではあったが、鉱山の社会化計画を含むノイラートの計画や方針は支持された。

4月13日、ホフマン政権は権力を回復する行動を起こし、ソビエト政権のメンバーを逮捕してバンベルグへ移送した。ノイラートも逮捕されたが駅で釈放された。「中央経済局」はもともとホフマン政権のもとで設置されたもので、このときは政治権力とは無関係なポストと見なされたのであろう。

こうして「第1次バイエルン・ソビエト」は大混乱のすえ消滅したが、4月13日、共産党のレヴィネが「第2次ソビエト共和国」の執行委員会代表に選ばれた。共産党にとっては偽物のソビエトを真のソビエトにする機会であったが、ノイラートには、ソ連の経験をドイツの現実に適用する試みのように思われた。彼は新体制のもとでも中央経済局のトップにとどまったが、それは共産党主導に反対する労働者の支持によるものであった。しかし、ホフマン政権の経済封鎖と農民の反発でミュンヘンの経済情勢は悪化するばかりであった。

ホフマン政権は、ベルリンの社会民主党右派政権と同様、右翼の復員軍人からなる民兵を動員した。4月16日にミュンヘンに向かって進軍を始めた彼らの装備と訓練は良好であり、急ごしらえの赤軍を圧倒した。戦闘は5月2日まで続いたが「第2次バイエルン・ソビエト共和国」は500人の戦死者、300人の戦傷者、多数の刑死者を出して崩壊した。ノイラートは5月16日に再度逮捕された。(このとき、右翼の民兵に加わった若者の中に、後の大物理学者ハイゼンベルグがいた。)

バイエルンに公布された戒厳令のもとで開かれた軍事裁判は苛烈であった。レヴィネは死刑、ミュッシュャムは15年、トラーは5年、ニキッシュは2年の

要塞禁固を宣告された。ランダウアーは獄中で虐殺された。1924年に保釈されたミュッシュャムは1933年にゲシュタポに逮捕され強制収容所で殺された。刑期を終えたトラーはニューヨークへ渡ったが、1939年、マドリッド陥落の報を聞いて自殺した。ソ連に追放あるいは逃走した共産党員は、アクセルロッドをはじめ、1930年代にスターリン政権によってそのほとんどが粛清されてしまった。

シューマンは第2次ソビエトの成立時に離脱し、ノイラートとの友人関係は終わる。クラノルトはノイラートともに逮捕されるが裁判にはかけられず釈放された。ノイラートの裁判は7月25日の有罪判決をもって終わる。マックス・ウェーバーをはじめ多数の有力な人々の弁護にもかかわらず、1年半の要塞禁固であった。しかし、彼はほどなく釈放される。オーストリアの外相であったオットー・バウアーの強力な働き掛けがあったためである。ただし、ドイツへの入国は禁止された。したがって、ハイデルベルグ大学で教職につく機会は失われた。ノイラートを弁護した人々は、ほぼ一様に彼は「社会主義者」というよりは「社会工学者」であり政治的には中立あるいは「あまりにナイーブ」(マックス・ウェーバー)であったと主張した。

その間の獄中で、ノイラートは1918年に出版された当時のベストセラー、シュペングラーの『西欧の没落』を読み、それを真っ向から批判する「反シュペングラー論」を書いた。その内容については次回にゆずろう。

彼らとは逆に、アイスナーを暗殺したグラフ・アルコ・ヴァレイは、一旦は死刑の判決を受けながら、減刑され1924年に釈放、第二次大戦前にはルフトハンザの重役になっている。

私たちはスターリンの「社民を主要打撃の対象とした」ことに強い批判をもっている。しかし、そのようなスターリンの主張に根拠を与えたのが、ドイツ社会民主党の多数派が右翼の民兵と組んで行ったベルリンにおけるスパルタクス・ブントに対する弾圧とバイエルン・ソビエトに対する攻撃であったことを無視することは出来ないであろう。もちろん、これは当時のヨーロッパ社会民主党全体の傾向であったわけではない。ハンガリー・ソビエト

政権の末期には、ハンガリーとオーストリアの社会民主党はベラ・クーン以下のソビエト政権幹部の安全な脱出を計画・実行している。その後ベラ・クーンはスターリンに粛清されたが蔵相のヴァルガと文相のルカーチは著名な学者としての後半生を過ごすことが出来た。しかし、あとに残された労働者たちはホルティの右翼政権のテロの犠牲となった。

5. 「赤いウイーン」におけるノイラート

5. 1 住宅計画から経済社会博物館へ

第1次大戦後のオーストリア第1共和制と社会民主党の役割については、第1部でその概略を述べた。ここでは、ウイーンという特別な都市におけるノイラートの活動について見ておこう。

オーストリアは連邦国家であり、ウイーンはその中の一つの州としての高度な自治をもっていた。保守的な農村地帯に対し、ウイーンは社会民主党の強固な地盤であり、社会民主党は彼らが思い描く社会主義をウイーンで先取りの実現しようと考えていた。すなわち改革の積み重ねによる「赤いウイーン」がそうなるはずであった。1919年5月の市政選挙で市政を掌握した社会民主党の基本政策はマックス・アドラーのプログラム、すなわち住宅建設から高等教育におよぶ、広義の「教育」を通して全プロレタリアートの生活を改善することであった。事実、1933年までに社会民主党主導下のウイーンではおよそ6万戸の労働者アパートが建設された。それらは公園、学校、幼稚園、体育施設、病院、コミュニティセンターなどを配置した住宅団地として開発された。成人教育も重要な事業であった。

アドラーのいわゆるオーストリア・マルクス主義では、正統派と同じくマルクスをドイツ古典哲学の継承者とみなすのであるが、ヘーゲルよりもカントを高く評価する。したがって、土台と上部構造との関連においても、文化や教育を重視し、「経済の社会化」を比較的軽視することになった。事実として、福祉、住宅、教育における実績に比べ、「赤いウイーン」における経済改革＝経済の社会化は成功しなかった。(正統派のマルクス主義から見る

と、これが1934年の敗退の原因であった。)

ウイーンへ戻ったノイラートは早速「社会経済研究所」の事務局長に任命された。また、1921年には大戦前からウイーンで組織されていた「小住宅・小農園協会」の事務局長を兼ねた。19世紀のウイーンの劣悪な住環境の中で、さほど裕福でない人々の間で郊外に小農園と粗末な小屋を持ち、週末を過ごす習慣が始まった。大戦中の食料不足時代にその習慣は一種の運動となり、地域ごとにコミュニティが形成され、1916年には13のコミュニティ、2000人のメンバーが集まってこの協会が結成されたのである。もちろん非政治的な組織であったが、会員の多くがホワイトカラーあるいはブルーカラーの労働者であり社会民主党の圧倒的な影響下にあった。市当局も、公有地の貸与や資金援助によって運動を促進し、ノイラートが活躍した1923年にはメンバーは約30000人、やがて50000人の大組織になった。

(私はかつてドナウ川を高速艇でブダペストからウイーンまでさかのぼったことがある。船がウイーンに近づくと林間に広く点在するそのような小別荘地の一端を見ることができた。概して質素なものであるが川に面した小屋の中にはベランダから直接釣り糸をたれる仕組みになっているものもある。)

1920年代のウイーン市の住宅政策では、二つの計画が並行して進められることになっていた。ひとつは、広い中庭をもち必要な学校やコミュニティ施設を備えた高層集合住宅群であり、「ウイーン風コミュニティ住宅」の構想である。もうひとつが郊外の縁辺部に広がる小庭園をもつ低層の戸建て住宅で「田園都市」の構想である。後者が「小住宅・小農園協会」の活動を拡充したもので、土地とインフラ整備資金の不足のために前者ほどは進展しなかった。

ノイラートの精力的活動によって、協会は市庁舎前の広場で大規模な野外展覧会を行った。完成した住宅や小庭園の実物展示のほか、図表、グラフ、画像を用いた統計などが展示された。展覧会が成功を収めた後、ノイラートはウイーン市長ヤコブ・ロイマンに提案し、この展示を拡大し、ウイーンのみならず都市計画の博物館として恒久化することを提案した。それは、ウイーンだけ

でなく世界的規模での経済や社会に関する博物館として市民教育の場とすることように計画されていた。市は援助を決定する。

1925年1月「経済社会博物館」がノイラートを館長として開館した。「労働と組織」、「文化と生活」、「住宅と都市開発」の3部門から構成され、画像による表示や統計が多用された。博物館の運営にはノイラートのほか2名の専任スタッフが当たった。ヨーゼフ・ヨードルバウアーとマリー・ライデマイスターである。マリーは数学者クルト・ライデマイスターの妹でゲッチンゲンで数学と物理学を学んだが、兄からノイラートの計画を聞き、協力を決めたのである。

ノイラートは博物館を教育機関と位置づけていた。それはオーストリア・マルクス主義のプログラムに沿ったものであったが、「高度に発達した産業と近代的経営はすべての市民に対してある最低限の教育を要求する」という彼の主張は、『資本論』第1巻13章「機械制大工業」のなかの「全面的に発達した個人」の「死活的な重要性」についてのマルクスの主張を思わせる。

「経済社会博物館」の展示は各国の関係者の注目を浴びた。デュッセルドルフ、ベルリン、シカゴ（科学技術館）、モスクウなどで、ウィーン式の展示が導入され、ノイラートが指導に出かけることもあった。（1926年のデュッセルドルフ訪問は、ミュンヘン裁判後の最初のドイツ入国となった。）ウィーンでは、様々なテーマを取り上げることによってストックは増大していた。これらの蓄積は後の「アイソタイプ」の運動に引き継がれ、現在もわれわれはその成果を享受している。

5. 2 「ウィーン学派」の形成と統一科学運動

第1次大戦の前後、ノイラートが戦時経済やバイエルン・ソビエトの社会化計画に没頭していたとき、かつて「第1次ウィーン学派」を構成していた友人たちは何をしていたのであろうか。1912年にフィリップ・フランクはアインシュタインの後任としてプラハに赴任し、ハンス・ハーンはツェルノヴィッツで就職していた。したがって彼らはこの間ほとんど会う機会がなかつ

た。1921年、ハーンがウイーン大学の数学教授として戻ってきたことで状況は変わった。ちょうどノイラートもミュンヘンから戻っていた。ハーンは当時出版されたばかりのヴィトゲンシュタインの『論理哲学論考』に注目し、セミナーでも取り上げた。ハーンはまた、空席になっていたマッハからボルツマンへ受け継がれてきた教授職にモーリツ・シュリックを招聘することに骨折った。1922年にシュリックが着任すると、その周りに研究者や学生が集まり始め、1924年以降、有名な木曜例会がスタートする。参加者の中にはハーンの学生であったクルト・ゲーデルもいた。

ハーンはオットーとオルガを紹介し、カルナップが加わった。カルナップは1926年にウイーン大学の教授資格を取って私講師となり、ベルリンのライヘンバッハを紹介した。ノイラートは、グループの反形而上学的立場を社会主義と同様に進歩的であると考えてこの動向を積極的に推進した。彼は「科学的世界観の普及」を目的として1927年11月にエルンスト・マッハ協会の設立を進めた。これには木曜例会の参加者たちも協力した。ただ、シュリックは必ずしも積極的ではなかった。

そして、1929年、ノイラート、ハーン、カルナップは「科学的世界把握－ウイーン学派」を起草し公開した。すなわち第2次ウイーン学派の宣言である。この文書の原案の起草者はノイラートであった。(ウイーン学派 Wiener Kreis という名称もノイラートが考えた。)

発表の舞台は、同年9月15、16日のプラハで開かれた「認識論と精密科学に関する第1回会議」であった。この会はエルンスト・マッハ協会と経験哲学協会が合同で開いたものである。後者はベルリンが中心で、そこではライヘンバッハが活躍していた。(1925年にドイツ共産党を離党したカール・コルシュもこれに加わっている。) また、ドイツ物理学会とドイツ数学会も同時期にプラハで第5回総会を開いていた。文書は5000部印刷され、フランクとベルリングループの援助を得て、プラハで開かれていたそれぞれの集会の参加者に配布された。

「科学的世界把握－ウイーン学派」の内容は、各国語に訳されすでに有名

である⁸⁾。(私はまだ見ていないが日本語訳も出ているはずである。)内容は、よく知られているように、啓蒙の精神にあふれた科学的合理主義の宣言であって、各種の科学批判が流行している近年の状況に照らしてみると、そのオプティミズムがいささか気になるであろう。もちろん、まだヒトラー政権は誕生しておらず、ナチスの行動を視野に入れて1944年に書かれた「啓蒙の弁証法」(アドルノーら)のような視点はまだない。

冒頭で、彼らは形而上学と神学の影響が、日常生活のみならず、科学の世界、大学の講義、哲学研究までを侵しつつあることを警戒する。それに対して、反形而上学、科学的世界把握をめざす潮流が各地でわき起こりつつあることを例を挙げつつ指摘する。彼らが挙げているのは、イギリスではラッセルとホワイトヘッド、アメリカではウィリアム・ジェイムズであり、そして、「新生ロシアでは、部分的に古い唯物論に傾くことはあっても、科学的世界把握が確実に追求されている。」と評価する。そして、マッハとボルツマンを軸とするウィーンの研究者的科学的世界把握に対する貢献が記述される。興味深いのは、マルクス主義に対するオットー・バウアー、ルドルフ・ヒルファディング、マックス・アドラーらの寄与がここで言及されていることである。現在では非主流派とされているオーストリア・マルクス主義(及び明示はされていないがオーストリア社会民主党の立場)は「マルクス主義はイデオロギーではなく科学である」というノイラートの理解に重なるものであった。

さらに、このグループの活動が哲学者に限定されるものではなく、多様な分野の研究者のものであることが強調され、神学や形而上学から遠ざかり科学的世界把握を達成しようとする目的を共有するあらゆる運動に対して開放されるとしている。

その後、彼らが考える「科学的世界把握」と反形而上学の主張の内容が開陳され、各分野ごとの課題が述べられる。最後に、反神学・反形而上学の立場に立つ科学的世界把握の運動が現代の生活全般にかかわる問題であることが主張される。そして、「科学的世界把握は生活に奉仕し、生活はそれを

享受する。」と締めくくられる。

ここに、ヨーロッパを覆う反動勢力とそれに対峙する「妖怪」=コミニズムの存在、中核である「同盟」の地位と役割の強調、理論と綱領的課題の分析と提示、そして労働運動へのアピールで終わる、かの有名な「マニフェスト」⁹⁾との構成上の類似と啓蒙的姿勢の共通性を見て取ることは容易であろう。

他方、理論的にも社会的実践の面でも対立しがちであったモーリツ・シュリックとその周辺の人々に対する周到な配慮が見られるのは興味深い。シュリックの師の大物理学者プランクは量子論の創始者であるが古典的な实在論者であり、マッハとの間でしばしば論争を行っている。シュリックは論理実証主義の中心人物のひとりであるが、キールから移ってきた当初は師に近い实在論者であった。ヴィトゲンシュタインの影響を受けて「言語論的転回」ともいうべき哲学的立場の変更を遂げたといわれる。それでも、徹底した反形而上学を主張したノイラートとの距離は埋まらなかった。しかも、社会運動とは一線を画するアカデミックな人物で、「科学的世界把握—ウイーン学派」がプロパガンダに偏しているとして批判的であった。

しかし、ノイラートらの「前書き」では、ボンに招聘されたシュリックがウイーンにとどまることを決意したことを一同が喜び、この文書が作成された事情が書かれている。

1930年、雑誌 *Annalen der Philosophie* は *Erkenntnis* になり、エルンスト・マッハ協会と経験哲学協会がスポンサーとなった。編集はカルナップとライヘンバッハがあたり、実質上ウイーン学派の雑誌になった。また、プランクとシュリックは「科学的世界把握に関する著作集」の編集・刊行を1929年に開始した。その一冊として、ノイラートは『経験的社会学』を出版したが、シュリックは当初はこの本の出版には乗り気でなかったといわれる。ノイラートは統一科学の構想を提起し、1933年から独自の叢書の刊行を始めた。また、博物館活動の中で開発した情報の映像による表示の普及に努力するなど、多面的に活動した。この間に、バイエルンの計画経済ではむしろ中立的

な「社会工学者」であったのが、マルクス主義に対する独自の理解を表明するようになった。結果としてシュリックらとの溝は埋まらず、第1次ウィーン学派時代の同志を中心とするグループ内の交流が深まってゆくことになる。

6. 亡命と国外における活動、そして死

前回述べたように、この間に社会民主党は1920年に政府から脱退し、国政での影響力を低下させてゆく。しかし、ウィーンにおける社会民主党市政は市民の支持のもとに存続した。1933年、ドルフスは国会の機能を停止して緊急令による統治を開始し、労働運動への弾圧を開始する。前回にも述べたことであるが、1934年2月12日、社会民主党系の共和国防衛隊の抵抗は2日間で制圧される。社会民主党と共産党の禁止、活動家の投獄、市民サービスや教育を含む公職からの社会主義者の追放が行なわれ、オーストリア第一共和国は実質的に滅び、「赤いウィーン」の実験も一旦は終了する¹⁰⁾。

エルンスト・マッハ協会、経済社会博物館も社会民主党の宣伝機関とみなされて閉鎖された。ちょうどノイラートはモスクウにいた。これよりさき1931年、ウィーン駐在のソ連大使が経済社会博物館のような組織をモスクウに設立する提案を伝えた。ノイラートは喜んで提案を受け容れ、毎年60日間モスクウで博物館と映像展示の指導と教育に当たるという契約を結んでいたのである。(ただ、当初はよかったソ連との関係も1930年代後半になると変化した。ノイラートらが開発した「絵文字」は学校を含めた公的機関での利用が政府の指示で進められたが、やがて、「リアリズム」の観点から批判されるようになり、協力者がスターリンによる粛清の犠牲になる。1937年以降、ノイラートはソ連の共産主義体制に対して極めて批判的になった。)

マリー・ライデマイスターからの電報は、エルンスト・マッハ協会、経済社会博物館の責任者が帰国すると直ちに逮捕されるだろうということであった。ノイラートはプラハのフィリップ・フランクのところへ直行した。カルナップは1931年にすでにプラハに移っていた。前回に言及したカルナップの日記の一節は、このときにノイラートやオルガと交わした会話によるもので

ある。それは1934年3月24日のことであった。オルガ、マリー・ライデマイスター、及び数人の協力者とともに、彼はポーランドとデンマークを経てハーグに落ち着いた。オランダには博物館活動の同志がおり、報酬は少なかったが仕事はあった。離散してゆく旧ウイーン学派の人々との接触を回復し、さらに活動を国際化するために、ノイラートはかねての念願であった統一科学に関する国際会議を組織する努力を開始した。34年の8月、フランクやカルナップのいるプラハで準備会議を開き、1935年9月パリで「第1回統一科学国際会議」が行なわれた。この会議に関する報告は、雑誌 *Erkenntnis* の第5巻に詳しく出ている¹¹⁾。

第2回はコペンハーゲン（1936年）で開かれ、ボーア、ハイゼンベルグら量子力学のコペンハーゲン学派の有力な研究者も参加して「因果律」について論じた。第3回はイギリスのケンブリッジ（1937年）、第4回は再びパリ（1938年）、第5回はアメリカのケンブリッジのハーバード大学（1939年）と引き続いて開かれ、ウイーン学派の科学哲学が次第に浸透していった。たとえば、1939年の会議は、すでにアメリカに移住していた多くの高名な研究者が一堂に会した観がある。1931年にアメリカに移ったファイグルはミネソタ大学を拠点に活動を始めていた。ヒトラーのチェコスロバキア侵攻によって、カルナップはシカゴ大学へ、フィリップ・フランクはハーバード大学へ移っていた。1933年のナチスの政権獲得によってベルリンからイスタブーンルに脱出したライヘンバッハはもちろん常連であった。ブリッジマンやクワインなど、それまでのアメリカの哲学界では少数派であった人々も参加した¹²⁾。

ウイーンでは、学生時代からの友人でオルガの兄、ハンス・ハーンが1934年のノイラートらの亡命直後に急死し、1936年にはシュリックが大学内で暗殺された。ノイラートによると、犯人は精神を病んだ挫折した学生であったが、国家や大学を牛耳っていたカトリック教団の間では、シュリックとその一党のよからぬ教育の結果であるとされていたという。こうして、もともとウイーンの学界では非主流的だったウイーン学派はほとんど消滅するが、多

数の亡命研究者の国際的活動によってアメリカやヨーロッパの各地でその影響力を発揮し始めていた。

統一科学については、パリの会議で18世紀のフランス百科全書派の作品に匹敵する「統一科学エンサイクロペディア」の必要性が主張され、その刊行が提案された。討議した後、提案は投票によって採択された。1936年、ノイラートは「統一科学研究所」をハーグに設立し、さらに「統一科学エンサイクロペディア組織委員会」を結成した。メンバーはノイラートとカルナップ、そしてフィリップ・フランク、チャールズ・モリス、イェルゲン・イェルゲンセン、ルイ・ルージエであった。1938年に最初の1巻が、ノイラート、カルナップ、モリスの編集でシカゴ大学出版部から刊行された。

この間、ウィーンの博物館で開発された絵文字による統計表示と映像展示の手法は、アイソタイプ ISOTYPE (International System of Typographical Picture Education) と命名され、普及活動が進んだ。1937年、オルガが腎臓の手術を受けたが術後に死んだ。

1940年、ヒトラー軍がオランダに進攻し危険が迫った。5月14日、ノイラートはマリー・ライデマイスターとともに、スケベリンヘンの波止場から夜陰に紛れて救命ボートで脱出した。25人乗りのボートには50人が乗り込み4人の学生が漕いでイギリスを目指した。幸い、イギリス海軍の駆逐艦に拾われてドーバーに着くことが出来たが、ドイツ語が母語であるノイラートとライデマイスターは逮捕され、ノイラートはマン島、ライデマイスターはロンドンの監獄に収容された。イギリスの哲学者スーザン・ステビングが釈放に奔走し、そして成功した。その際、アインシュタインの手紙が有効であったといわれる。翌1941年2月に二人は釈放され、マルクス主義の歴史家で政治学者の G.D.H. コールの世話でオクスフォードに落ち着くことが出来た。2月26日、二人は結婚した。(早世したアンナとオルガに対し、マリーは長命であった、1995年にノイラートの没後50年を記念してウィーンで開かれたシンポジウムにも出席していたはずである。)

オクスフォードでノイラートは、オールソールズ・カレッジで「論理実証主

義と社会科学」というテーマで講義をおこなった。多分大学での最初の授業である。そして、スーザン・ステビングやマリーとともにアイソタイプの研究所を設立した。また、地方都市プリンストンの都市計画、とくにスラムの再開発や高齢者の混住などを基本とする計画に参画した。戦時中にもかかわらず、彼にとってはイギリスの地方都市で過ごした晩年が生涯でもっとも平穏な時期であったと思われる。

1945年12月22日、大戦も終わり、戦後初の平和なクリスマスを迎える幸福な気分になりながら、書齋でくつろいでいたノイラートはマリーの目の前で急死した。

おわりに

以上がノイラートの生涯の手短かなスケッチである。彼を含むウイーン学派の中心メンバーは、ファシズムと第二次大戦に文字通りほんろうされた。親しんだ国や町から追われ、大学からも追われ、最終的に落ち着き先となったのはイギリスとアメリカであった。ウイーンの狭い世界から離れることで、ウイーン学派の「科学的世界把握」は国際的な場で認知されるようになった。丁度、ナチズムの野蛮と非合理主義を断罪する主張としての社会的機能がこれに期待されたのであろう。しかも、このことによってイギリスの伝統的な経験論やアメリカのプラグマティズムに対して理論的厳密性を注入する役割をも果たしたといえるだろう。

この間、ウイーン学派を研究するオーストリアの研究者の中に、「もし、ナチスでなく社会民主党がドイツとオーストリアで権力を獲得していたら……」という問いを發する人々がいるのを私は知った。おそらく、第二次大戦は起こらず、中欧の大学や学問文化の栄光が輝いたのであろう、というのである。しかし、アメリカの学問文化は現在とはよほど異なるものになっていたに違いない。すなくとも、ウイーン学派とフランクフルト学派の影響を取り去ったアメリカの現代思想は貧寒なものになっていたであろう。そして、そのいずれもが、マルクス主義や社会主義と深いかかわりをもっていたので

ある。

この研究ノートが掲載される『国際文化論集』第21号は藤沢道郎教授の退任記念号である。藤沢教授の多方面にわたる研究活動の中で、グラシムとその時代におけるイタリア社会運動史研究があることを我々は知っている。同時期に展開された中部ヨーロッパの革命とその挫折における一知識人の物語が記念号に掲載されることになったのは筆者の喜びである。

(第3章ノート)

1) 以下の記述は基本的に以下の文献によっている。

[C96] Nancy Cartwright, Jordi Cat, Lola Fleck, and Thomas E. Uebel, *Otto Neurath: Philosophy between Science and Politics*, Cambridge UP, 1996 の前半の第1部 “A life between science and politics”

[S96] Elisabeth Nemeth and Friedlich Stadler (ed.), *Encyclopedia and Utopia*, Kluwer, 1996 に収められた、息子のパウル・ノイラートによる評伝。

[N73] Marie Neurath and Robert S. Cohen (ed.), *Otto Neurath, Empiricism and Sociology*, Reidel, 1973 の前半の部分：友人知人による回想記録。

2) O. Neurath, *Zur Anschauung der Antike über Handel, Gewerbe und Landwirtschaft*, *Jahrbücher für National Ökonomie und Statistitk*, 32/33 1906/7

3) R. Haller, the First Vienna Circle, in [U91] Thomas E. Uebel, *Rediscovering the Forgotten Vienna Circle*, Kluwer, 1991.

4) 1991年、Princeton Science Library の1冊としてペーパーバックで再刊されたとき、Jules Vuillemin による解説的序文が付け加えられた。

5) 1910年代前半から大戦中にかけて書かれた17編の論文は1冊にまとめて出版された。O. Neurath, *Durch die Kriegswirtschaft zur Naturwirtschaft*, 1919, München. その目次、序文、および17編中4編の論文の英訳は [N73] 123-157ページにある。

6) 第一次大戦の記述は前回と同じくチャーチルの『世界大戦』によっている。

7) このプログラムの概要は、[C96] の33ページのブロック図から伺うことが出来る。

- 8) [N73] にも英訳が掲載されている。
- 9) いうまでもなく「共産党宣言」のことである。
- 10) オーストリア第二共和制では、戦間期の教訓がよく生かされた。この問題は、矢田俊隆『オーストリア現代史の教訓』刀水書房、1995のメインテーマである。
- 11) *Erkenntnis* Bd.5, pp.377-427 報告はノイラートによる。イギリスのエイヤーをはじめ、後の分析哲学の代表者が多数出席している。また、ルカシュビッツ、タルスキ、コタルピンスキ、アジェキエビッツらポーランド学派の参加が目立つ。
- 12) 1991年秋に MIT 開かれた Society for Social Studies of Science の年会で、ハーバードの科学史家ジェラルド・ホルトンは、MIT の STS (科学・技術・社会) 研究と教育のプログラムの源泉は1950年代に当時の学長に対してなされたフィリップ・フランクの提言であることを史実に基づいて示した。前回の冒頭に書いた、ボストン大学アインシュタイン研究センターにおけるコーエンとの出会いは、私がこの学会に出席したときの出来事である。

A Note on Otto Neurath(2)

Kunio GOTO

This second part of the note deals with a biographical sketch of Otto Neurath, an eminent social scientist and an activist in many areas of social movement. It also gives a description of the political storm which raged about the Wetem intellectual community in the Inter World Wars time.

Neurath began his carrier as a social scientist with an excellent student of the University of Vienna. He transferred to the Berlin University with his friend Anna Schapire, his later wife. In Berlin he finished his dissertation on the economy of classical antiquity.

In 1907, after came back to Vienna, he joined a small group of young scholars, which was to be called by the First Vienna Circle. Every Thursday night, Hans Hahn and his sister Olga, Joseph and Phillip Frank, Otto and Anna Neurath and others assembled at a cafe to discuss fundamental problems of science and philosophy. The great scholars, who had strongly influenced these young people, were Ernst Mach, Henri Poincaré and Pièrre Duhem.

After the outbreak of the First World War, Neurath was mobilized and committed to the wartime economy. Before the war, he had already studied the war economics. According to his theory, war economy was a transient phase toward a new planned economy directed by a central planning agency. He thought in such a new system, the deficit of capitalist economy, unemployment and cyclic economic reces-

sion, could be overcome.

After the War, Neurath had an opportunity to realize his idea in Bavaria Revolution as the Director of the Central Planning Administration of the Bavaria Soviet Republic in 1919. But, this Soviet Republic was soon defeated by the right wing militia. And it had too short life. Neurath was arrested and, was on trial at the military court and convicted. But he was rescued by Max Bauer, the Foreign Minister of the Social Democrats Government of Austrian Republic.

Came back to Vienna, he joined the social and education movement of "Red Vienna", and worked as the Director of newly established Socioeconomic Museum, where he developed so many kind of pictorial display, which became the source of his ISOTYPE. He joined the Vienna Circle for scientific philosophy as a core member and a leftist. Because he believed the anti-metaphysical attitude of the Circle was as progressive as the socialist movement. This attitude was consistent to the doctrine of the Austro-Marxism.

After the coup-de-tat of the Right Wing Administration of Dörfus on 22 February 1934, he should escape to Holland. Then he must go to England, hired by Nazi troops, which invaded Netherlands in 1940. He died suddenly at Oxford in 1945.

As an immigrated scholar, he organized the International Conferences for scientific world conception and the unified science: at Paris, Cambridge UK, and Cambridge Ma. USA. Thus, the scientific world conception of Vienna Circle and ISOTYPE influenced the Western intellectual community, especially that of the Anglo-American world.